

# 日本婦道記

箭竹

山本周五郎

青空文庫



矢はまっすぐに飛んだ、晩秋のよく晴れた日の午後で、空気は結晶体のようにきびしく澄みとおっている、矢はそのなかを、まるで光の糸を張ったように飛び、塚あづちのあたりで小さな点になったとみると、ころよい音をたてて的につき立った。——やはりあの矢だ。家綱いえつなはそううなずきながら、的につき立った矢をしばらく見まもっていたが、やがて脇につくばっている扨徒こしやうにふりかえつて、

「そこにある矢をみなとつてみせい」

といった、扨徒の者が矢立に残っているのをすべて取つてきしだした。四本あった。かれはその筈巻はずまきの下にあたるところを一本ずつ丁寧にしらべてみた、すると、はたしてそのなかにも一本あった、筈巻の下のところ「大願」という二字が、ごく小さく銘のように彫りつけてある。いま射た矢にもそれがあつた、去年あたりからときどきその矢にあたる、はじめは気づかなかつたが、持つたときの重さや、弦をはなれるときの具合や、いかにもこころよい飛びざまなど、いろいろなよい条件がそろっているので、ああまたこの矢

かと思ひあたるようになった。矢にもずいぶん癖のあるものだが、それほどはつきりと性しやうのそろつたものはめずらしい、それでよく注意してみると、思ひあたる矢にはきまつたように「大願」という文字が彫りつけてあるのだつた。

「たずねることがある、丹後たんごをよんでまいれ、西尾にしお丹後だ」

そう云つて家綱は床しょうぎ几こにかけた。扈從のひとりごが走つていった。

御弓矢槍奉行おゆみややりぶぎようの丹後守忠長たんごのかみただながはすぐに伺候した。家綱はまだ十九歳であるが、三代

家光いえみつの潤か達たつな気性をうけてうまれ、父に似てなかなか峻しゅんげん 厳げんなどところがおおかつた。

弓矢奉行などがじかに呼びつけられる例は稀まれなことなので、丹後守は叱責しつせきされるものと思つたのであろう、平伏した額のあたりは紙のように白かつた。

「ゆるす、近う」

二度まで促されて膝行しつこうする丹後守に、家綱は持つていた一本の矢をわたした。

「その筈巻のすぐ下のところをみい、なにやら銘のような文字が彫つてある」

「はつ……」

「読めたか」

「はつ、仰せのごとく大願と彫りつけてあるかに覚えます」

「一年ほどまえより折おりにその矢をみる、どこから出たものか、いかなる者の作か、とり糺ただしてまいれ」

「恐れながら」

丹後守は平伏して云った。

「御上意の旨は御不興にございませうや、もしさようなれば御道具吟味の役目として丹後いかようにもお詫わびをつかまつります」

「いやそのほうは申付けたとおりにすればよい、なるべく早く致せ」

丹後守はその矢を持つてさがった。

將軍の御用の矢は、諸国の大名たちから献上されるものを精選し、もつともよい作だけをすすめることは云うまでもない、丹後守はみずから御蔵へいって、献上別になっている矢箱を念いりにしらべはじめた。ずいぶんの数だからそう早急にはわからなかった。それでしたやくの者にも手伝わしたが、三日めになつてようやく問題の品のはいつている矢箱がみつかった。それは三河みかわのくに岡崎の水野けんもつ忠ただよし善から献上されたものであった。棹わくに嵌はめて十本ずつ十重ねになつている箱が五つある。つまり五百本あるわけだが、そのなかから「大願」という文字を彫りつけた矢が五十本あまり出てきた。

丹後守はその矢を持つて水野家をおとずれた。けんもつ忠善もひじょうにおどろいた。大願とはなにを祈念するのかわらないけれど、將軍の手に触れるものだけに、そのような品を気付かないで献上したことは重大な粗忽そごつである。

「うえさまには御不興のようにござったか」

「そう存じまして、当座のお詫びを言ごんじょう上うつかまつりましたところ、ただ申付けたとおり吟味せよ、急ぐぞ、との仰せにございました、それでとりあえず、お知らせにまいったしだいでございます」

忠善はぐつと唇をひきむすび、なにか思案をしていたようすだったが、

「これは家来どもには知らせたくないと思う、さいわいこの月末は参さんきん覲ぎんのおいとまに当るから、日を早めて頂き、自分で帰国してすぐとり糺すでしょう、それまで御前をたのむ」

「承知つかまつりました、できるだけ早く吟味のしだいお知らせねがいます」

念を押して丹後守は帰った。けんもつ忠善はじつとながいこと矢筈のきわの小さな文字をみつめていた。

これは万治二年まんじ（一六五九）十月なかばのことである。話はここで十八年まえ、すなわち寛永十八年かんえい（一六四一）にかえる、ところは駿河すするがのくに田中城下、新秋の風ふきそめ

る八月のある日の午後のことであつた。

二

その時みよは縁側から庭の柿をみていた。まだ若木のきざはしで、今年はじめて五つほど実をつけたが、雨や風のために落ちてもう二つしか残っていない、それも熟すまで杖についているかどうかわからないけれど、いまはまだ葉簇はむらのあいだに、つやつやとした堅そうな光をみえかくれさせている。初生りはつなの柿を青竹で作った小さな籠にいれ、子供に背負わせると息災にそだつという俗習がある、みよは青柿をながめながらそれを空想した。二歳の誕生を迎える安之助やすのすけが、柿をいれた青竹の小さな籠を背にして、よちよちとあるく姿は考えるだけでも愛らしくたのしいものだった。——どうか一つでもよいから残つて呉くれるとよい。若い母親には酔うほどの空想だった。そこへ家士の足守忠七郎あしもりちゆうしちろうがはせ入つて来た、旅支度のままで脇の折戸からいきなり庭へ駆けこんで来たのである。埃まみほこりれの髪、瘦やせて落ちくぼんだ頬、血の気のない顫ふるえる唇、それはひと眼で悪い出来事を直感させるものだった。

「御挨拶はごめん蒙ります」

かれは庭さきに膝をおろして云つた、

「旦那さまには、久能山にて御生害にございます」

あまりに突然すぎたし、またあまりに思いがけない言葉だった、みよはわれ知らず「えつ」ときき返しそうにしてようやく自分を抑え、膝の上に置いた手にぐつと力をいれた、鼓動が胸膈をつきやぶりそうに思えた。忠七郎は乾いた唇をうちふるわせながら続けた。

「まちがいのもとには些細なことでございましたが、賀川弥左衛門さまが云いつのり、ついに抜き合わせて、旦那さまにはみごとに賀川さまをお仕止めなさいました。見ていた者も旦那さまに非分はない、賀川さまが悪いと申し合っておりましたが、旦那さまは勤役ちゆうの不始末を申しわけなしと思召し、結末のことを詳しく目付役へお書き遣しのうえ、その夜半、宿所にて御切腹にございました」

みよは昂奮を抑えたこわねでたずねた。

「それで、その大變は、お役目をおはたしあそばしてから後か、それともお役目はまだ残っていてか」



「不幸ちゆうのさいわいには、すでに奉納のお役は滞りなく終ったあとでございました」

ああそれでお名にかかわることはない、みよはそう思うと同時に、はじめてぶるぶるとつきあげてくる身顛いをとめられなくなつた。良人の百記ももぎがお役を申付かつて家を出かけたのは七日まえのことだつた。その月二日に將軍家光に世子せいしが誕生した、水野けんもつ忠善はその祝儀として久能山東照宮へ石の鳥居を奉納することになり、茅野かやの百記はその事務がしらとして久能山へ出張したのである、なみなみの場合でないから、お役をはたしたかどうかということは、悲嘆のなかにもなによりみよの気懸りなところだつたのである。

「安之助への御遺言などはなかつたか」

「……はい」

若い家士はつらそうに眼を伏せた、

「目付役へ始末書をお遺しあそばしましたほかは、一通の御遺書もなく、御遺言のこともございませんでした」

みよは寂しそうに頷いた、いかにも寂しそうな眼だつた。

すぐにもお咎めとがの使者があるであろう、そう思ったので、召使たちにその旨を告げ、家内の始末にかかつた。二百石の書院番で家財といつても多くはない、お上に収められるも

ののほかは僅かな衣類と仏壇だけがめぼしいものだった。ふだんつましく家計を守つたけれど、結婚して三年めであるし、安之助が生れたりして貯蓄は乏しかった、それで売れるものは売つて、召使たちの餞せんべつ別の足しにしなければならなかつた。

城から上使が来たのはその翌々日の朝のことだった、みよは水髪に結び、着替えをさせた安之助を抱いて上使を迎えた。

「べつして大切なるお役目ちゆう、私の争いによつて刃傷にんじょうに及びたる始末、重罪をも申付くべきところ、即座に自裁して責を負いたる仕方しんみように思召され、よつて食しょく禄ろく召上げ遺族には領内追放を申付くるものなり」おたつしの趣意はそういうものだった。それから上使の役人は久能山で没収した百記の遺品のうち、金二枚に小銭のはいつている金かね囊ぶくろと、大小ひと腰のかたな、それにひとつかみの遺髪をとりだして渡した。上使をおくりだしてから、みよは仏壇にあかしをいれ、良人の遺髪をあげて、香を炷たいた。そして安之助とふたりしてその前に坐つたとき、はじめて思うままに、しかしこえをしのんで泣いた。

「安之助、さあ、お手を合わせて、よくおがむのですよ、こうして」

幼ない者の手を合わせてやり、低く唱しやう名みやう念みやう仏しながら、みよは涙のなかからしつか

りと遺髪を見あげて云った。

「旦那さま、安之助の事は御安心あそばせ、かならずりっぱなさむらいに育てあげてごらんにいれます。御遺言のなかつたのは、わたくしをお信じあそばしてのこととぞんじます。みよはそのお心を決して忘れませぬ」

そのとき襖ふすまのかなたで、耐えかねたように誰かのすすり泣くこえが聞えた。

### 三

あくる日の朝、みよは安之助を背に負つて家を出ていった。美濃みののくに加納藩かのうはんに実家があるので、ひとまずそこへ落ち着くことにきめたのである。お咎めによる追放なので、知りびとは云うまでもなく、召使たちも見送ることはできなかつた。ただひとりだけ、藤ふ枝じの在じから奉公ほうこうに来ていた下僕げぼくの六兵衛ろくべえが、目付役とともに島田しまたの宿しゆくまで送つてきた。かれは美濃までの供をねがつてきかなかつたけれど、みよはかたく拒んでゆるさなかつた。残暑の照りかえしで、ひろい川原は眼もくらみそうな暑さだった、母子おやこはその川原をとぼとぼあるいてゆき、やがて人足の肩よに倚よつてかなたの岸へと越していった。

それから三日経った。早<sup>ひで</sup>りの続いた夏のあとで、待ち兼ねた雨がまさしく秋のおとずれのように降りだした日の夜、八時ころと思えるじぶん<sup>みずもり</sup>に藤枝在の水守という村にある六兵衛の家をひそかにおとずれる者があつた。六兵衛の婿の次郎吉が出てみると、城下のお屋敷でみかけたことのあるみよにまぎれはなかつた。安之助を背に負つてびつしより濡れていた。

「まあこれはどうあそばしました」六兵衛もびつくりしてとんで来た、

「いやそれよりもまずお召替えをなさらなければいけません。ただいま洗足<sup>すすぎ</sup>をお持ち申します」

娘のさだと婿をせきたてながら、自分が洗足をとつてすぐに母子を上へあげ、娘の晴着と孫の物を当座のまにあわせて着替えをさせた。いちど眼をさまして泣きだした安之助をようやく寝かしつけてから、みよは六兵衛と婿夫婦を前にして坐つた。そして、主従のよしみにすがつてたのむのであるが、この土地でなにかたつきの業<sup>わざ</sup>にとりつくまで母子ふたりの世話をしてもらえぬだろうかと云いだした。六兵衛はおろおろと声をふるわせてさえぎつた。

「お言葉ではございますが、おまえさまは御国ばらいのお身の上でございましょう、おふ

たりさまのお世話は願っても出たいところでございますけれども、まんいちこれが知れたときは国法にそむいた罪に問われ、おまえさまばかりか安之助さまの御一命にもかかわると存じます、それよりはともかく美濃のおさとへお帰りあそばすほうがよろしいのではございませんか」

「それはよく考えてみたのです」

みよはしずかに、けれど心のきまつたしつかりとした口調で云った、

「けれど百記は水野けんもつさまの御家臣でした、不運に死にはしても、百記の魂はかならずごしゆくんの御守護をしている筈です。わたくしは茅野百記の妻、安之助はその世継ぎなのです。たとえどのような重罪に問われましようと、さむらいにはごしゆくんのおくにを離れてほかに生きる道はないのです、……主従は三世までというではないか」

六兵衛は両手で顔をおおい、こえをしのんでむせびあげた、さむらいの道のきびしさもさることながら、良人の魂の遺っている土地を去りがたい妻の心が、みよの言葉の裏にありとうつつてみえたのである。

「よくわかりました、そのお覚悟なればもうなにも申上げることがございません、お世話というほどのことはできませんがお力の足しくらいにはなります、お心おきなくおいで

あそばしませ」

母子はその夜から六兵衛の世話になることになった。

家族は六兵衛と娘夫婦、それにまだ幼ない孫が二人あり、半自作のあまり豊かならぬ農家だったので、はじめから安閑としているつもりはなかつた。みよは、家人のとめるのもきかずに、あくる日から甲斐<sup>か</sup>々々<sup>が</sup>しく野良<sup>の</sup>へ手伝いに出た。世を忍んで、しかし心のひきしまつた生活がはじめられた、昼は耕地ではたらき、夜は草鞋<sup>わらじ</sup>をつくり繩をなつた、かまどの前にも躰<sup>か</sup>み、野風呂を焚いた。そういう日々の中、たつたいちどだけ人眼にかくれて泣いたことがあつた、それは背戸にある柿の若木が、枝もたわわに赤い実をつけたのをみたときだつた。——城下の家の柿はどうしたかしら。そう思うのといっしよに、あの悪い知らせのあつた日縁側からうつりと青柿を眺めていた自分の姿が思いかえされた。良人が生きていたら、そしてあの初生りの柿が一つでも熟れていたら、いまごろは青竹で籠をあん、安之助の背に負わせて、あやうげな足どりであるくさまを良人と共に笑いながら見ていたであらう。みよの眼にはそのありさまがまざまざと見えた、それは未練な、恥ずかしいことだつた。——こんな事で二度と泣いてはいけぬ。みよは泣きながら、繰返し自分にそう誓つていた。

翌年七月、けんもつ忠善は三河のくに吉田城へと封ほうを移された。それでみよも吉田へゆく決心をした、六兵衛と家人たちは言葉をつくしてとめた。此処ここにいればこそ乏しくとも無事な日が暮せるのである、幼ない者をつれ、まだ若い婦人の身で、しるべもない他国へゆけばどんな難儀に遭うかもわからない、せめて和子わこが十歳になるまではこの土地で暮すようにと。

#### 四

みよの決心は、けれど変らなかつた。「ごしゆくんけんもつさまのいらつしやる土地が母子の生きるべきところなのです、身の難儀ははじめから覚悟のことですから」そう云つて心づよくしゆつたつの支度をはじめた。

六兵衛に見送られて大井川を渡つたのは八月はじめのことだつた。道みちすがら次つぎは残暑にやまされたが、さいわい水にもあたらず、安之助もすこやかに旅をつづけて四日めに三河のくに吉田（今の豊橋市）へ着いた。たやすく記しるせないかずかずの苦勞があつたけれど、その年の冬には小坂井こさかいの里に小あきないの掛け小屋をはじめることができ、どうやらふた

りの口はすこせることになった。みよは安之助に少しづつ素読そとくの口まねをさせたり、筆を持たせてかな文字を書かせたりしながら、いとまを惜しんでせつせと草鞋をつくった、海道のことでは往來の人は絶え間がなかったから、それは追われるほどよく売れた。まして六兵衛の家でならい覚えたのは、農夫が自分の使うために作るものなので、はじめから売るように出来たものとは保ちかたが違っていた、それゆえしばらくするうちすっかり評判になり、よその店を通り越しても買いに来る客ができて、僅かながら不時の用にと貯えもつめるようになった。

安之助が六歳になるとみよは付近の禪寺へたのんで学問をはじめさせた、寺僧は由よしありげな母子のひとがらに同情したとみえ、——いつそ寺へお預けなされたらおまえさまもお身軽になれましようが。と親切にすすめて呉れた、しかしみよは子をはなす気にはなれなかった。まだ朝々の霜のふかい早春の野道を、安之助は元気に寺へかよってゆき、帰つて来ると、声をはりあげて復習をした、そしてみよの夜なべはそれからいつそう晩おそくまで続けられるようになった。こうしてどうやら身のまわりも落ち着いたと思うとき、水野忠善はふたたび国替えとなり、五万石に加封かほうのうえおなじ三河の岡崎城へ移された、正保しょうほう二年七月のことである。まる二年のあいだに多少の知りびともでき、なりわいの道もつい



てほつとしたところだったけれど、みよの心には少しも未練はなかった。ふしぎなまわりあわせで、そのときもまた新秋八月の、残暑のきびしい一日、少しばかりの荷物を負い安之助の手をひいて、みよは小坂井の里を西へと立っていった。

岡崎もはじめての土地ではあったが、東海道ではゆびおりの繁昌な駅だったから、伝馬町すじの裏に長屋の一軒を借りると、その家ぬしの世話で、さしたる苦勞もなく城下はずれのなわてみち隙道に、小坂井でしていたのとおなじ小あきないの店をもつ事ができた。家主の名は熊造くまぞうとあった。固ぶとりに肥った小がらなからだつきで、髭ひげだらけの顔にするどい眼つきをしているが、近所じゆうへ響くようなこえで日和のあいさつなどをする男だった。むかしは馬を曳ひいて海道を往来したという、暴れ者で、ずいぶん世間から嫌われたのだそうだが、それだけに世の裏おもてをよく知っていて、困っている者があれば身を剥はいても面倒をみるという風だった、いまでは伝馬問屋の店をもって親方ともいわれ、年々岡崎藩から幕府へ献上される竹束の輸送は、ほとんどかれの店がひとり占めの御用になっていた。熊造のひきたてもあつたろうけれど、隙道のみよの店はしぜんと海道に名をひろめていった、評判のもととはなんといいっても草鞋だった。——やごめわろんじは百日はける。やごめは寡婦やごめ、わろんじは草鞋のおかざきぶりであるが、そんな通り言葉ができたほどみ

よの草鞋は人々にもてはやされた。

はりつめた生きかたの身にゆく春秋をかぞえるいとまはなかった。安之助が十二歳になって、かたちばかりに鎧よろいぞ初めの祝いをしてから間もなく、家ぬしの熊造があらたまつたようすで再縁のはなしをもちだした。相手はところの郷土で、年は四十を越しているが家はもう子供にゆずっていたし、家産もゆたかなので、もしみよさえ承知なら別に家を建て暮してもよいということだった。

「今だから申上げますが、実はこれまでになんどもこういうはなしがあつたのです」とかれは膝をかたくしてくそまじめに云つた。

「あなたほどのご縹きりよう織で独り身だからむりもないことだが、わたしは蔭かげながら御気性をお察し申していたので、御相談にあがるまでもなくなにぬかすとひと言で断わつてきました。けれどもこの縁談だけはわたしも欲ができました、郷土といえぱりにさむらいでおる、失礼ながら安之助さまにもゆくすえ御運のひらけるもとだと思えますが」

熊造の言葉は心からの親切がこもっていた、みよはしまいまで黙つて聴いていたが、聴き終るとすぐにきつぱりと断わつた、いささかも思い惑うことのない、きつぱりと割りきつた断わりかただった。

「やっぱりそうですか」

熊造はがっかりしたようすだった、けれど落胆のなかにもみよの凜りんとした気性をつきとめたことはたのもしく思えたらしい、かれはそのはなしをぴたりと切上げ、

「それではあらためて御相談があります」と坐りなおした。

## 五

相談というのはなりわいを変えることだった。安之助もそろそろ世間の見えはじめの年ではあるし、あきない店などを出しているとあらぬ噂うわさがたちやすものである、だからそれをやめてほかに生活たつきの法を考えてはどうかというのだった。

「それには一ついいことがある、御承知かもしれませんがこの岡崎は竹の産地で年々お江戸へ献上する数もたいへんなものですが、そのなかに箭箆やべらにする竹があります、この竹を削つて磨いて、箭箆にする仕事があるのですがやってごらんになりますか」

「そのような仕事が女でもできるのでしょうか」

「おもてむきはいけないことになっているが、なにお出入りの屋敷でその宰領をしている

からわたしがたのめばどうにかありません、これなら手間賃もいいし、草鞋をつくるよりは骨も折れないでしょう、その気がありならお世話をいたします」

考えることはなかった。みよは驟道の店をたたんだ。

箭竹やだけつくりは考えたほどたやすくはなかった。箭篋やみきまたは箭やみきともいう竹のつくり方には

いろいろな作法がある、十二束そく、あるいは十三束三伏みつふせなどといって、拳こぶしひと握りを束と

よんで長さをきめる、そしてみきには節が三つあるのがきまりで、「おっとり節」「なかの

節」「すげ節」と上から順に名がつけられる。太さも長さもほとんどきまったのを選び、

節を削り をみがき、筈はずを截きつたうえ下塗りをすればよいのだが、すべてが熟練を要する

勘しごとで、はじめのうちはよく失敗をした、節を深く削りすぎたり、筈截りの手がすべ

つて へ割りこんだりした、しぜん自分でも手を傷つけることが多い、しばらくのあいだ

はいつも左手の指に白い巻き木綿の絶えるときがなかった。けれどもはじめがむつかしか

ただだけに、馴れてくると、みよはめきめきと腕をあげた、そして自分でも面白くなるに

つれて、誰のつくるものにも負けないりっぱな箭をつくってゆこうという望みがおこった、

それには竹を厳選しなければならぬから、渡された数と仕上りの数にひらきができる、

しぜん手間賃は少なくなるがみよは構わずやっていった。——竹にむだをだしすぎる。は

たしてそういう苦情がきた、土地から産する箭竹には限りがあるので、そうむだを多くしては困るといふのだった、みよは云いわけはしなかった。これから気をつけてむだを出さぬように致しますと答えた、けれど仕事は少しも変えずに続けていた。

安之助はすこやかに成長していった、辛苦のなかに育ちながら、氣質ものびのびとしていたし、年と共にからだつきも人にすぐれて逞たくましくなつた。学問には満性寺まんしょうじの方丈ほうじょうへ通つていた。十三歳の夏から投なげまち町にある町道場へも入門させたが、父親の血をうけたのであろう、これは学問ほどにはすすまないようすだつた。こうしてさらに年月が経ち、安之助は十八歳の春を迎えた。そしてある夜のこと、かれはめずらしくかたちをただして母親の前に坐つた。

「母上お願いがございます」

ひどく思いつめた眼つきだつたので、なにを云いだすかと思つてみると、自分もたつきを助けるために働きたいというのであつた。

「わたくしも十八歳です、男いちにんまえの稼ぎはできなくとも、母子ふたりの口をすすくらひはどうかになると存じます、どうぞ働きにやつて下さいまし」

「おやめなさい、そんなことは聞きたくありません」

「いいえ申します、母上にはお世話になりすぎています。修業ちゆうのからだゆえ今日まではおなさけに甘えておりました、けれども充分です、これ以上母上にご苦労をかけることはできません、わたくしが代ります、どうか母上はもう賃仕事などおやめになって下さい、お願いですから安之助に代らせて下さいまし」

「あなたは考えちがいをしています」

みよはしずかにさえぎって云った、

「母が働いてきたのはあなたをりっぱに成人させたいためにはちがいありません、けれどもそれさえはたせば役が済むというわけではないのです」

「その言葉は安之助にはわかりません」

「わからない筈はないでしょう、それとも、いつかお話し申した父上の御最期のことはもうお忘れですか」

そう云われて安之助はぎよつとしたようすだった。みよの顔も苦しそうに蒼あおずんだ、みよは面を伏せ、低くつひや呟くような声でしずかに続けた。

「父上は、不運な出来事のために、御奉公なかばで世をお早めなさいました、やむをえなかつたのでしよう、そうせずにはいられない場合だったのでしよう。けれど……さむらい

の道にはずれたと申上げなければなりません、死んでゆく父上にも、おそらくそのことがなによりもお苦しかったと思います、父上の御気性は母がよく存じています、母には、父上の苦しいお心のうちがよくわかるのです。生きるかぎり生きてごしゆくんに奉公すべきからだを、私ごとのために自害しなければならなくなつた、さむらいにとってこれほど無念な、苦しいことはありません、母にはそれがよくわかるのです、どんなにおつらかつたことか、どんなに御無念だつたことか……」

安之助は腕で面を押えながら、耐え兼ねたように噎むせびあげた。

「ご生害のとき」

みよはそつと眼をぬぐいながら云つた、

「父上がいちばんお考えになつたのは、あなたのことだと思ひます、あなたが人にすぐれた武士になり、父のぶんまで御奉公をするようにとそれだけお望みなすつたと思ひます。あなたにはそう思へませんか」

「そう思ひます、母上、そう思ひます」

「それならご自分の修業を一心になさい、そして千人にすぐれた武士になるのです、それだけがあなたのつとめなのです、母のことなど気をつかつてはいけません、母には母のつ

とめがあるのです、あなたを育てることと……父上のつぐないをすることです」

「つぐないと仰おつしやるんですか」

「つぐないです、父上の仕残した御奉公をつぐない申すのです、それが茅野百記の妻としての一生のつとめです」

安之助はしんそこから感動していた、かれは涙に濡れた眼をぬぐい、屹きつとかたちを正して母を見あげた。

「よくわかりました母上、わたくしは一心に修業をいたします、そして千人にすぐれた武士になります」

「それをお忘れなさるな、道はまだまだ遠いのですよ」

「けれどいつかは、母上……いつかはわたくしたちの真心が、とのさまにわかって頂ける時がございますね」

その言葉までうち消す気強さはみよにはなかったし、しかもながく忘れることができなかったのである。母と子の辛苦はどのような酬いをも期待するものではない、おのれのまことをつらぬきとおせばそれでよいのだ、けれども「いつかはこの真心をこしゆくんにわかって頂けるだろう」という安之助の気持もよくわかった。それがみよの心に未練をおこ



させた、ちやうど六兵衛の家の背戸で熟れた柿の実をみつけたときのよう、「母の心」がどうしようもなくみよをうごかしたのである。——せめて安之助だけは世にだしたい。みよは母の愛情から一つのことを思いついた、それは箭竹をつくるとき、はずまき 箆巻の下にあたるどころへ「大願」と二字を小さく彫りつけることだった。きわめて小さく、たやすくはわからないように。もしかすればそれがごしゅくんの手に触れるかもしれない、矢は的に射当てるものだから……。みよはますますよい矢をつくるようになった。そして必ず「大願」の二字を彫りつけていた。どうぞこの文字がとのさまのお眼にとまりますように。そう祈りながら……。

## 六

みずから審問に当たったけんもつ忠善は、みよの申立てを聴きながら泣いた、審問が終つて、自分の居間へはいつてからも涙がせきあげてきてとまらなかつた。——女にもあれほどの者がいたのか。いくたびもそう思った。武士の妻としては当然の覚悟かもしれない、しかし当然のことがなかなかおこなわれにくいものである。当面の大事にはりっぱに働く

ことができる者も、十年ふたいてんの心を持ち続けることはむづかしい。みよはかくべつ手柄をたてたというのではないし、かたちに現われた功績などはなかった。しかし良人の遺志をついで二十年、みじん微塵もゆるがぬ一心をつらぬきとおした壮烈さは世に稀なものである、まことにそれは壮烈というべきだった、そういう一心こそは、まことの武士をうみ、世の土台となるものである。忠善はすぐに書状をしたためた、江戸では丹後守が待ち兼ねているにちがいない。かれはてみじかに事の始終を記したうえ、左のような章で筆を措おいた。

——重ねて申上げそろ、大願の二字はけんもつの眼にこそ触れめとて彫りつけ候そうろうものにごぞそろ、うえさまおん眼を汚し奉り候儀は、おそらくはみよの一心を神明の加護せさせたまうところと存じそろ、べつに使者を以て言上もつつかまつるべく候も、おんもとよりも御前よしなに御披露のほどたのみいりそろ。余事にわたり憚りはばかながら、かかるおんなこそ国のいしずえとも思われ、おそれながらうえさまおんためにも御祝ごしゅうちやく着申上ぐべく存じ奉りそろ。

安之助はほどなくめしだされて父の跡目を再興した。みよはそのとき、なおこう云つてわが子を戒めたのである、

「これで望みがかなったと思うとまちがいですよ、むしろこれから本当の御奉公がはじまるのですから、今までよりもっと心をひきしめ、ひとの十倍もお役にたつ覚悟でなければなりません……あなたは茅野百記の子です、ひとさまとはかくべつなのですからね」



# 青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1942（昭和17）年12月

※表題は底本では、「箭竹《やだけ》」となっています。

※初出時の表題は「箭竹―岡崎藩の女性」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 日本婦道記

## 箭竹

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>